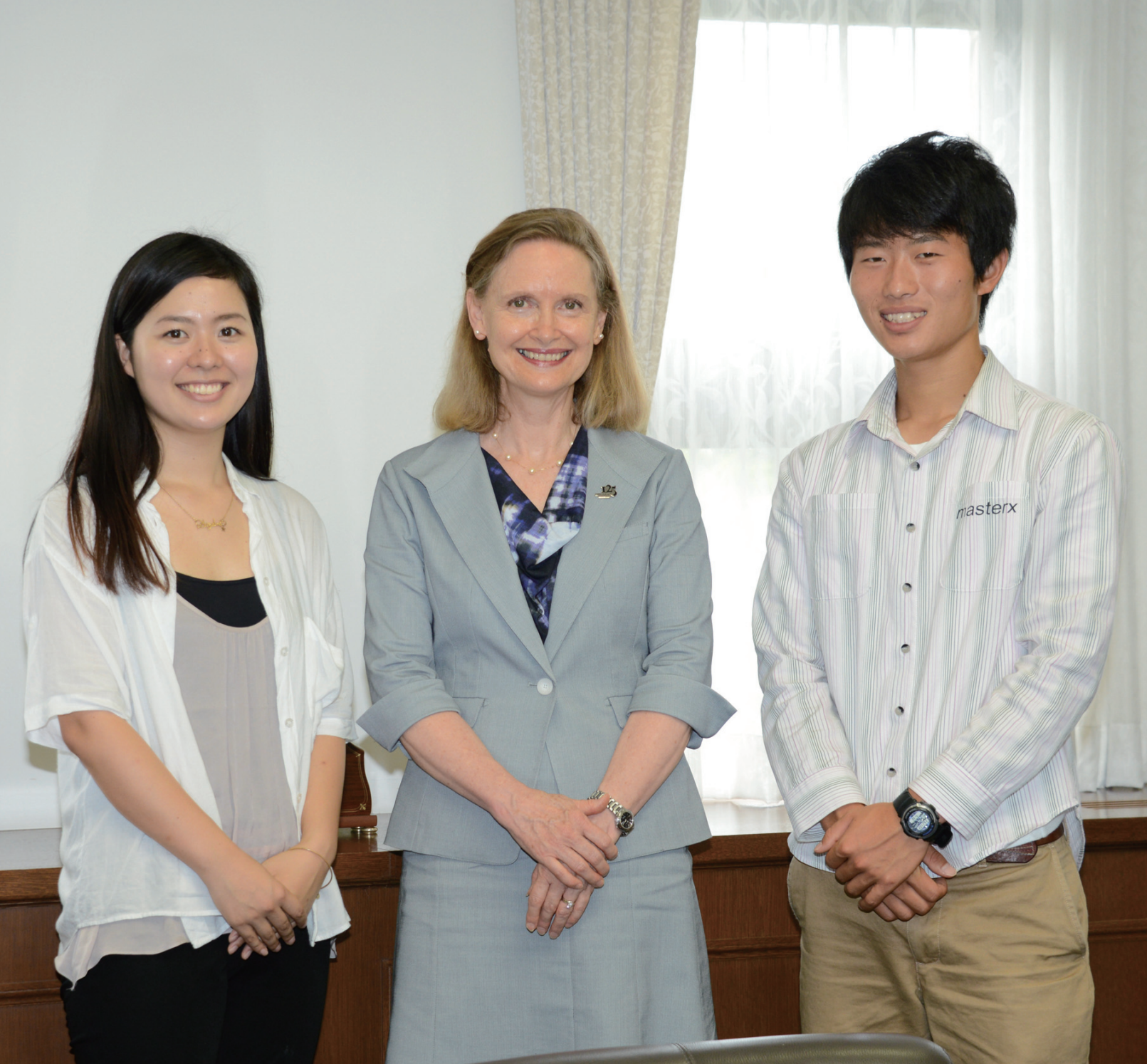




ルース・M・グルーベル院長

アメリカ・ミネソタ州出身。ネブラスカ大学リンカーン校政治学大学院修了（政治学博士）。宣教師の両親とともに来日し、2歳から高校卒業までのほとんどを日本で過ごす。1996年に関西学院宣教師、社会学部助教授、98年から社会学部教授、2011年から高中部長、12年から初等部長。研究領域は、国際関係論。日本の消費者組合運動などの社会運動、地域や市民の国際意識等を研究テーマとしている。現在、国際NGOや平和運動の立ち上げ及び活動に参加する「世界市民」を動機づける要因と教育的な影響を分析している。



特集 受け継がれて1世紀 心に響く 私たちの“Mastery for Service”

「奉仕のための練達」と訳される関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は、1912年、初代高等学部長となったC.J.L. ベーツ先生（第4代院長）によって提唱され、今年で100年を迎えます。ルース・M・グルーベル院長と学生の座談会を通じて、“Mastery for Service”に込められた意味をあらためて考え、1世紀を経た今、その教えがどのように学生たちの心に響き、引き継がれているのかを紹介します。

「スクールモットー『Mastery for Service』について、グルーベル院長の考えをお聞かせください。」

院長 提唱から100年が過ぎ、世界が変わってもなお『Mastery for Service』という言葉が愛し続けられる理由は、どんな時代でも何か心に響く意味があるからだと思います。その精神は人それぞれ違うでしょうし、人生の中でも時期によって意味が変わっていくような気がします。何か一つのことを一生懸命に身に付け、それを用いて周りの人や世界の人たちを支えるということもありますが、的を一つに絞ってそのエキスパートにならないといけないということです。就職して、家族ができて、定年退職して、人生の移り変わりとともに、自身の経験、身に付く才能、趣味は変化するでしょう。また、周りのニーズも変わるでしょう。「今の自分だったらこういうことができるんじゃないか」と、その時の自分の能力を人のために使うのが私が考える

る『Mastery for Service』であり、一生かけてその姿勢で生きることがその素晴らしいことだと思います。また、キリスト教主義から生まれたモットーなので、相手を尊敬し、理解しようとし、愛情を持って関わるということが大切です。やってあげるという意識ではなく、みんな仲間だという気持ちで奉仕をする。例えば、小学生が元氣よくあいさつすることによって周りの人たちが励まされるという本当に小さなことでも『Mastery for Service』だと思います。

**私たちは自分に対して
もっと期待できる
それによって
周りも豊かになれる**

「この言葉に出会われた時のお気持ちは。」

院長 まず『Mastery』という言葉が印象的で、自分の能力を磨くことが大事だというのが心に残りました。私たちは一人ひとり違う能力、賜物を持っています。それを見つめるのは大変ですけれども、実際にどういうことが自分のできるのか、自分の得意なものは何かを考え、またこういうことがしたいから一生懸命勉強する、スポーツの練習をするという姿勢が大切ですね。私たちは自分に対してもっと期待したいと思っていますし、それによって周りもきっと豊かになれるはずです。『Mastery』ということとは本当に大事だと思います。

**自分を鍛える機会を
積み重ねて
誰かのために
貢献できる人になる**

「中村さん、院長のお話を受けてどう思いますか。」

中村 私が実際にスクールモットーである『Mastery for Service』を意識したのは大学1年生でフィリピンに行き、世界にはいろんな現状の方がいると知った時です。自分が大学で勉強でき



小森貴裕さん
社会学部3年生
ウインドサーフィンチーム主将。1986年に創設され、2000年に活動を休止していたウインドサーフィンチームを1年生の時に10年ぶりに立ち上げる。たった一人でのスタートだったが、今では10人の部員と共に全国制覇を目指して活動中。2年生の時にインカレ個人の部で優勝。経験豊富な4年生が優位とされるウインドサーフィンで、見事日本一を勝ち取り、関学の名を全国にとどろかせた。関西学院中学部・高等部卒。



甲子園浜で練習する小森さん

一番いい解釈だと思っています。他者をどこまで思いやるのか、聖書の中の「すべての人の僕（しもべ）になりたい」「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という二つの言葉が今も残っており、それを実行できる人になりたいと思っています。活動しているところです。

『Mastery for Service』は人によって異なり、時代によっても変化するというのはすごく共感でき、それを自分で実感しながら行動に移すことが大事だと思います。

ー実際に大学の活動で、どのように行動に移していますか。

小森 大学入学後、自分自身のためにウインドサーフィンの活動を始めましたが、1年生の中盤ごろから関学にウインドサーフィンチームをつくるんだという意識が芽生えました。そのために自分は何ができるのかを考え、まず関学チームの絶対的なリーダーとなる手段として、



後輩を指導する小森さん（左）。夏休みは毎日、日の出から日没まで練習するなど圧倒的な練習量を誇り、2012年度学生ナショナルチーム選考会では1位で日本代表入りを果たした。今後の目標は「ウインドサーフィンチームの発展と継続のために後輩を強化して強いチームにすること」。

誰よりも練習して成績を残すことに専念しました。そして2年生の春に本気でチームをつくらうと思い、朝から晩まで一人で名簿集めや勧誘を続けて2カ月後に3人の後輩が入ってくれました。しかも初めての大会で、手の皮がむけて血が出るまで頑張り、団体で準優勝したのです。自分の全てを教えた後輩が自分の期待に応えようと頑張っている姿やその成長がうれしくて。その時に、



関西学院大学はアジアの大学で初めて、世界で3校目に国連ボランティア計画（UNV）と協定を結び、2004年から学生をボランティアとして開発途上国へ派遣する「国連学生ボランティア」を実施している。中村さんは本プログラムに参加しアフリカのマラウイに派遣された。写真は現地で取材活動する中村さん（左）。



2011年秋、国連ボランティア計画（UNV）事務局が来日し、中村さん（左から2人目）は「Heart on Coin “絆” プロジェクト」メンバーの関学生とともに被災地を回った。“絆”プロジェクトの支援先は宮城県の小中学校15校に拡大し、世界41カ国からはメッセージと約460万円の募金が集まった（2012年5月現在）。

ることや毎日ご飯を食べられることに疑問を持ち、さまざまな人がいる中で自分は何をしなければいけないのだろうかと考えるようになりました。そして、誰かのためになることがしたいと思い、「国連学生ボランティア」に参加したり「Heart on Coin “絆”プロジェクト」という震災復興支援活動に取り組んだりしたのですが、迷惑をかけることや自分のふがいなさを感じることもが多く、そういった時には自分を鍛える機会を与えていただいているんだと考えるようになりました。今は、自分を鍛えるのが8割、誰かに貢献できているのが2割くらいですが、自分を鍛える機会を積み重ねる中で貢献度を上げていくことが私の目指す『Mastery for Service』かなと思います。グローバル院長がニーズも自分の能力も変化していくとおっしゃいましたが、私はその変化に応じて本当の意味で誰かのためになれるような人になりたいという気持ちを持ち続けたいですね。

院長 中村さんはいろいろな

活動をされていますね。その原動力は何でしょうか。

中村 ハングリー精神です。私自身の能力は高くないと自覚していますので、自分があこがれ、すてきだと思いう人に近づくためには、その人たちが普通にできることを努力で補わなければなりません。そのためには、現状で努力し続けられる人と、何か機会をもらって力を出す人との2種類があり、私は後者のタイプなので、たくさんの人に支えられ、いろんなことをさせていただいています。



中村静香さん
総合政策学部4年生
2年生の時に「国連学生ボランティア」としてアフリカのマラウイに派遣され、現地の政府機関でウェブ運営に携わる。東日本大震災の直後から「Heart on Coin “絆” プロジェクト」という震災復興支援プログラムを立ち上げ、世界中から集めた募金をメッセージと一緒に被災地の学校へ届ける活動を続けている。秋からはタイへ交換留学する予定。

後輩とチームへの強い思いが自分自身をも成長させてくれる

ー小森さんの考えられる『Mastery for Service』は。

小森 僕は中学部から関西学院に入学し、『Mastery for Service』についてずっと教えられてきました。やはりキリスト教主義に基づくものというイメージが強く、グローバル院長もおっしゃったように愛情を持って相手に関わる、つまり他者を思いやるということが自分の中では



自分のつくった場所に入ってきてくれた後輩たちに少しでもいい環境を提供し、今年度、来年度と続くいいチームにしたいという思いが生まれました。僕の活動の原動力は「後輩、チームのために」という思いです。しんどくても後輩が来るから面倒を見てあげないという思いが強くて、気付かないうちに僕自身も後輩に練習させられていたのかなと思います。それこそが自分の学び、自分を成長させてくれるのだとあらためて実感できます。

院長 お二人から素晴らしいお話を聞けてうれしいです。自分のことから他人のことへと関心を移すというのは、成長の証だと思います。先日、東京の同窓会で90歳の同窓の方にお話を伺いました。在学中は戦争など大変な時代で、“Mastery for Service”も陰での奉仕というか、あまり外に出さない静かなイメージだったそうです。ですが今は、もっと力強く元気な“Mastery for Service”が必要なのではないか、そしてそれがベッツ先生の考えられていたものでは

ないかとおっしゃいました。お二人のように、人の見えないところで一生懸命努力し、他の人のために自分を磨き、リーダーシップを発揮することが、“Mastery for Service”だと思います。

時間や場所を超えた 関学コミュニティ 同窓生と在学生のつながり

— 中村さんは今回、同窓会の奨学金を受けられましたね。

中村 はい。奨学金を頂いたのでタイへ交換留学に行けることになりました。震災復興支援活動に対してもOB・OGの方々に募金していただいたり、人を紹介していただいたりしました。その時に同窓生の方々の心意気にすごく感動しました。「働いているので直接何かすることはできないがサポートしたい」「後輩たちがやっているのなら」という思いで応援してくださる方が多く、私

たちはそういった方々の気持ちを引き継ぎ、もっと行動に生かさないといけないと思いました。私は本当にたくさんの人々に支えられているな、卒業したら後輩たちをサポートできるような人間になりたいな、と特に感じた一年でした。

— 小森さんは同窓生とのつながりがありますか。

小森 10年前には関学にもウィンドサーフィン部があったというのを知り、昨年の夏、入つてにOBの方を探して40人くらいと連絡を取ることができました。皆さん、一度は途切れた流れが復活したことをすごく喜んでくださり、現役主催で開いたOB会には北海道や関東を含め約20人の方に集まっていただきました。そこで感じたのは母校愛というか、それがすごく温かいものだということ。世代を超えた交流の中に“Mastery for Service”が感じられました。卒業して何十年後でも、学生と関わる機会があればたとえ遠方からでも集まって

くれる、そして応援してくれるというのはすごく関学らしいし、関学生像は昔も今も変わらないものなんだ、関学での学びはやはり大事なもののなんだと実感しました。

中村 私の所属するボランティア団体でも、そういった同窓の方々とつながれるような制度を整えたいと考えています。自分から直接、同窓の方に聞かれたのは就活でのOB訪問が初めてでしたが、もし大学に入つてすぐに知り合えていたらいろいろな協力や助言、教育の機会を頂き、活動にも変化が生まれたかもしれないですね。私のような思いの学生はたくさんいると思うので、同窓生に気軽に連絡が取れるような仕組みがあればいいなと思っています。

院長 関西学院というコミュニティは場所や時間を超えて存在するものですから、そこでの交わりや、出会いはとても大切にしていかなければいけないと思いますね。

人生が変化する時に 素晴らしい “Mastery for Service”が 見つけられる

— 最後にお二人には今後の抱負を、グローバル院長には同窓生へのメッセージを頂きたいと思います。

中村 10月から来年3月まで交換留学でタイのチェンマイに国際経営学を学びに行き、4月からは重工業メーカーで働くことになっています。残りの学生生活では、自分が立ち上げた震災復興のボランティアプログラムがもっと組織化されて円滑に活動できるようにできる限りを尽くしたいです。また、留学では専門分野はもちろん、世界情勢や日本のことをもっとよく知り、語学力もビジネスで使えるレベルにまで上げて社会に出たいと思っています。

小森 ウィンドサーフィンチームの発展と継続が今の最大の目標です。自分が卒業しても10年、20年と続く組織をつくるのが僕の課題

であり、残り2年間でどれだけ整備できるか、そのためにできることはやり尽くそうと思っています。

院長 同窓の方には、お仕事を退職された方、これから第2の人生をスタートされる方などさまざまな状況の方がいらつしやいますが、これからまた新しい“Mastery for Service”をぜひ探してくださいとお伝えたいです。人生の節目で戸惑ってしまう、ちょっと落ち込んでしまうということは誰にでもあります。そういう時こそ、「次の“Mastery for Service”は何だろう」と考えていただきたいです。提供するのはいままで培った仕事関係の能力なのか、退職後の時間なのか、それともまた新たなスキルを見つけたのか。変化は自分や周りを考えるいいチャンスです。きつと何か素晴らしいものが見つかると思います。皆さんこれからの“Mastery for Service”を大変楽しみにしています。

— 皆さん、ありがとうございました。

グローバル院長の、心に残る一言 ——— 学び・熟練し・そして奉仕しなさい ———

昨年の全国支部長会議の中で、グローバル院長は、ジョン・ウェスレー (John Wesley) (注1) の唱えた “Gain all you can, Save all you can, and Give all you can.” (注2) という言葉を引用し、“Mastery for Service”の意味を簡潔明快に語られました。

「出来るだけ儲けなさい 出来るだけ貯金しなさい 出来るだけ与えなさい」という、現代資本主義の理念ともいわれる意味から、「出来るだけ学びなさい 出来るだけ熟練しなさい そして出来るだけ奉仕しなさい」という、より高潔な人間愛の理念へと昇華された解釈は、非常にわかりやすく腑に落ちました。

関西学院創立125周年を迎えるに当たり、同窓生一人ひとりが自分の原点を見つめなおし、自分の特性を活かしつつ、それぞれの立場での“Mastery for Service”を体現していく道しるべとなる一言です。

注1 ジョン・ウェスレー (John Wesley)
1703年-1791年 英国人 メソジスト教会創始者
彼の提唱したメソジスト運動の社会福祉や道徳の影響は大きく、
18世紀のイギリスをフランス革命のような血の革命から救ったとも言われています。

注2 ルカによる福音書 12章 16-21に記された金持ちの愚か者への教訓として
ウェスレーが唱えた有名な言葉